Le Petit Prince の誘い（いざな）

――「あなた（たち）」« vous » への呼びかけが示すもの――

小　林　文　生

キーワード：*Le Petit Prince* ／代名詞 vous ／責任／読者

サン＝テグジュペリの『星の王子さま』*Le Petit Prince* (1) の語り手である飛行士は、この物語の最後のページで、わずか十数行の文章中に何度も代名詞の vous を用いて読者に語りかけ、懇願している。もしアフリカの砂漠に行ったら、ここが確かにあの場所だとわかるように、この絵をよく見ておいてほしい、そしてもしこの地点を通りかかるようなことがあったら、急ぐことなく、あの星の下で待ってみてほしいと。そこでもし彼が姿を現したら、一刻も早くぼくに知らせてほしいと。次のとおりである。

> Ça c’est pour moi, le plus beau et le plus triste paysage du monde. C’est le même paysage que celui de la page précédente, mais je l’ai dessiné une fois encore pour bien vous[A)] le montrer. C’est ici que le petit prince a apparu sur terre, puis disparu.
>
> Regardez attentivement ce paysage afin d’être sûrs de le reconnaître, si vous[B)] voyagez un jour en Afrique, dans le désert. Et, s’il vous[C)] arrive de passer par là, je vous[D)] en supplie, ne vous[E)] pressez pas, attendez un peu sous l’étoile ! Si alors un enfant vient à vous[F)], s’il rit, s’il a des cheveux d’or, s’il ne répond pas quand on l’interroge, vous[G)] devinerez bien qui il est. Alors soyez gentils ! Ne me laissez pas tellement triste : écrivez-moi vite qu’il est revenu... [p.99]

これは、ぼくにとって世界でいちばん美しくていちばん悲しい景色だ。前のページと同じ景色だが、それをもう一度描いたのは、みんなによく見てもらうためだ。王子さまが現れて、それから姿を消したのは、ここなのだ。

この景色を注意深く見ておいてほしい、みんながいつかアフリカの砂漠を旅することになったとき、確かにここだとわかるように。そして、もしそこを通ることになったら、お願いだから、急がないで、あの星の下でちょっと待ってみてほしい。そこで、もし子どもがみんなのところに来て、笑って、金色の髪をしていて、質問をしても答えなかったら、それが誰だかわかるはずだ。そうしたら、どうかお願いだ。ぼくをこんなふうに悲しませておかないでほしい、王子さまが戻ってきたとすぐにぼくに手紙を書いてほしい……。

ここで、vous という代名詞 (2) で表されて、語り手が呼びかけている相手とは、もちろん、今この作品の最後のページを読み終えつつある読者である。二箇所の下線部 « Regardez attentivement ce paysage afin d'être sûrs »「この景色を注意深く見ておいてほしい、〔中略〕確かにここだとわかるように」と、« soyez gentils »「お願いだから」という表現に表れる形容詞が複数形（surs, gentils）なので、この命令形（Regardez, soyez）の二人称 vous は複数形であることがわかる。つまり読者の全員に向けて「みなさん」と呼びかけているのである。

ところで、この直前のページで、語り手はこう言っている。

« Pour vous qui aimez aussi le petit prince... » [p.97]
「みなさんも王子さまが好きだから、みなさんにとって……」

「みなさんも」aussi と言っているのは、「ぼく」« je »（語り手＝飛行士）と同様に、という意味である。そして、この文は、「ぼくたちの知らないヒツジがバラを食べてしまったかどうかで、世界はまったく違ったものになっ

てしまう……。」と続く。「ぼくたちの知らないヒツジ」は、フランス語原文では «un mouton que nous ne connaissons pas » である。直前の「みなさん」への言及とあわせて考えれば、「ぼくたち」nous という代名詞が指し示すのは、「ぼく」と「みなさん」ということになる。つまり、ヒツジがバラを食べてしまうかもしれないという悲劇的な出来事を、「ぼく」は読者（みなさん）と分かち合うのを当然のこととして表現している。

ここで、もう一箇所 « nous » という代名詞が用いられているのを思い起こそう。第 IV 章で、数字を見せてあげないとものごとを理解できない大人たちとの対比で、「人生というものがわかっているぼくたちは、数字なんかどうでもいい」と述べている。「人生というものがわかっているぼくたち」のフランス語原文は、« nous qui comprenons la vie » [p.24] である。この nous とは誰を指すか。一人称複数だから、「ぼく」と誰かを含むわけだが、その「誰か」の位置に読者を誘っているようである。この直後で語り手は、本当はこの話を「むかしむかしあるところに」と始まる妖精物語のようにしたかったし、「人生のわかる人たちにはその方がずっと本当らしく見えるだろう」と述べた上で、「なぜなら、ぼくの本を軽々しく読んでほしくないからだ」«Car je n’aime pas qu’on lise mon livre à la légère. » [p.24] と述べている。この文で「読む」の主語は代名詞 on で示される。つまり、不特定の「ひと」である。これが読者に向けて言われていることから論理的に考えて、読者は、ここで「軽々しく読む」ような「ひと」には該当しないことを求められている。ということは、おのずと上記の「人生というものがわかっているぼくたち」に属することを求められている。

このように、*Le Petit Prince* という作品の語り手は、「みなさん」と呼びかけた相手（読者）を、語り手自身のいわば「加担者」« complice » として取り込もうとする。それを端的に表現するのが、先に引用した「みなさんも王子さまが好きだから、みなさんにとって……」« vous qui aimez aussi le petit prince » である。

ここで、「好きだ」« aimer » という動詞で言われている内容には、この物語の核心部分が凝縮されている。「ぼく」（飛行士＝語り手）が王子を「好きだ」

というのは何を意味しているか。それは、第 XXI 章に語られる、キツネとの出会いによって王子が習得した「飼い慣らす apprivoiser」という概念にさかのぼる。キツネは「飼い慣らす」の意味を言い換えて「絆を創る créer des liens」と言い、そのためには時間をかけるのが必須であることが強調される。

「ぼくを飼い慣らしてよ。」と言うキツネに向かって、王子が、「そうしたいけど、あまり時間がないんだよ。友だちを見つけなきゃならないし、たくさんのことを知らなきゃいけないんだ。」と答えると、それに対してキツネは、「飼い慣らしたものしか、知っているとは言えないよ。人間はもう何も知る時間なんてないんだ。すっかり出来合いのものを店で買う。でも友だちを売っている店なんてないから、人間にはもう友だちもいない。友だちが欲しいんなら、ぼくを飼い慣らしてくれよ。」[以上、p.73] と諭すように懇願する。そうして時間を過ごした結果、「飼い慣らす」ことの意味を習得した王子に、キツネが別れ際に授けるのが、「きみが時間を費やしてあげたからきみのバラはそんなに大切なものになったんだ。」« C’est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante. » [p.78] という言葉である。キツネによるイニシエーションの神髄とも言えるこの言葉は、筆者の考えでは、この物語の中で最も重要な言葉である。« le temps que tu as perdu »「きみが費やしてあげた時間」という表現にすべてがこめられている。これを、この直前の場面に描かれるキツネと王子の短い会話とならべて考えるなら、「失う perdre」ことによって「得る gagner」という人生哲学がここに読み取れるからである。次のとおりである。

> « Ah ! dit le renard... Je pleurerai.
>
> — C’est ta faute, dit le petit prince, je ne te souhaitais point de mal, mais tu as voulu que je t’apprivoise...
>
> — Bien sûr, dit le renard.
>
> — Mais tu vas pleurer ! dit le petit prince.
>
> — Bien sûr, dit le renard.

— Alors tu n’y gagnes rien !

— J’y gagne, dit le renard, à cause de la couleur du blé. » [p.74]

「ああ、ぼく泣いちゃうよ。」とキツネが言った。
「きみのせいだよ」と王子さまは言った。「きみを苦しめたいなんて思ってなかったよ、だけどきみが飼い慣らして欲しいって言うから。」
「もちろんさ。」とキツネは言った。
「でも泣いちゃうんだ」と王子さまは言った。
「もちろんさ。」とキツネは言った。
「じゃ、何の得にもならないじゃないか。」
「得するんだよ、麦の色のおかげでね」とキツネは言った。

これまで麦はキツネにとって何の意味も持たなかったが、今や麦の黄金色が王子の金髪を思い起こさせ、切り離せない関係になった。そのようになるまで、キツネと王子は、互いに相手のために時間を費やした（時間を失った perdre）から、「飼い慣らす」つまり「絆を創る」ことになり、互いに「世界で唯一の」« unique au monde » [p.72] 存在になった。したがって、「失う perdre」ことによってこそ、「得する gagner」ことになると言うのである。

王子からこの話を聞いて理解した飛行士＝語り手は、みずからが王子によって apprivoiser されたこと、その相互作用として王子を apprivoiser したこと、そのことによって、王子を本当に「知っている connaître」と言えること（上に引用したように、キツネは「飼い慣らしたものしか知っていることにならない」« on ne connaît que les choses que l’on apprivoise » [p.73] と言っていた）、そうしたことによって王子が「本当に話のできる相手」となったことを知る。じっさい、語り手は、「6 年前にサハラ砂漠で不時着するまで、本当に話し相手にできる人が誰もいず一人きりで暮らしていた」« J’ai vécu seul, sans personne avec qui parler véritablement, jusqu’à une panne dans le désert du Sahara, il y a six ans. » [p.15] と言っていた。

先述の「好きだ」« aimer » という表現の背景にはそのような事情がある。

このことをふまえて、「みなさんも王子さまが好きだから、みなさんにとって……」« vous qui aimez aussi le petit prince » を言い換えるなら次のようになるだろう。

vous qui êtes apprivoisés par le petit prince...
c'est-à-dire, qui avez apprivoisé le petit prince...
c'est-à-dire, qui avez perdu du temps pour le petit prince...
c'est-à-dire, qui connaissez le petit prince...
c'est-à-dire, qui pouvez parler véritablement avec le petit prince...

王子に apprivoiser されたみなさん……
ということはつまり、王子を apprivoiser したみなさん……
ということはつまり、王子のために時間を費やしたみなさん……
ということはつまり、王子を知っているみなさん……
ということはつまり、王子と本当に話ができるみなさん……

ただし、このように言い換えることができるには、ひとつの条件がある。それは、読者がこの物語の語り手「ぼく」に耳を傾ける（écouter）ことができたということだ。耳を傾けるということは、語られる物語に魅力を感じて、その中に何かを探すことだ。「砂漠が美しいのはどこかに井戸が隠されているからだ」« Ce qui embellit le désert, c'est qu'il cache un puits quelque part. » [p.82] と述べられていたとおり、美しい物語だと感じて、隠されている「井戸」を探し求めることだ。そして、その「井戸」を見つけたと思ったとき、読者と語り手（ないしは書物）とのあいだに真の対話（parler véritablement）が成立するだろう。*Le Petit Prince* という作品に即して言えば、読者の対話の相手は、とりもなおさず、語り手の「ぼく」（＝飛行士）だけではなく王子でもある。

この場合、その「井戸」が何であるかは、読者それぞれによって異なるだろう。なぜなら、それは読者からの問いかけ次第だからだ。この問いか

けに対して書物は（語り手は、王子は）返答を差し出す。たいていは、直接の返答ではないだろう。むしろ、逆に書物（語り手、王子）からの問いかけが繰り返し差し向けられるだろう。つまり、ある作品を読んでいて「なぜ」と疑問を抱くとき、それはじつは書物からの問いかけに応答を求められているということでもある。そして、王子が、飛行士の質問にはいっこうに答えようとしなかったように、書物は、読者が真剣に問いかけと返事をしない限りは、対話に応じてくれないだろう。この意味では、王子と飛行士（語り手）との関係を、書物と読者の関係のアレゴリーと捉えることも可能だ。語り手＝飛行士は、「ぼくは、夜、星に耳を傾けるのが好きだ」« J'aime la nuit écouter les étoiles. » [p.95] と言っている。星を眺めるのではなく、星に耳を傾ける（écouter）のだ。それは、それらの星のどこかにいるはずの王子の笑い声を聞き当てるためだ。

ちなみに、プルーストは、書物に関して「〔作者と読者の〕二つのテクスト」という言い方をしている。「書物に書かれていることを読者が自分の内部に再認するのは、その書物の真実性の証だが、その逆もあって、少なくともある程度は、二つのテクストのあいだの違いはしばしば著者ではなく読者に帰せられうる [(3)]」と言うのである。これに倣って、先の「ぼくは、夜、星に耳を傾けるのが好きだ」という文に言われている星々を飛行士の眼前にあるテクストに喩えるなら、どこかにいるはずの王子とは、飛行士の内面のテクストであると言うこともできるだろう。

飛行士は、この内面のテクストを大切にしまい続けてきた。そして、「ぼくはこの話をまだ一度も話したことがない。」« Je n'ai jamais encore raconté cette histoire. » [p.95] と言っているとおり、いま初めてこの物語を読者に対して差しだそうとしている。それも、飛行士の内面に保たれている王子という存在を、可能な限りそのままの姿で、ということは不明な部分を多く残したまま [(4)]、伝えようとする謙虚な姿勢を守りながら。

Le Petit Prince が優れた文学作品である理由のひとつがそこにあると筆者は思う。サン＝テグジュペリは、「見ること」、「理解すること」、「出会うこと」、「愛すること」、「役に立つこと」、「はかないこと」、「喪失することと

獲得すること」、「人間であること」等々、この作品に秘められたのと同じ種々のメッセージを、何らかのマニフェストという形で書くこともできたかもしれない。しかし、この *Le Petit Prince* という作品を貫いているのは、声高に叫ぶことのない、禁欲的とすら呼べる慎み深さと謙虚さである。それは、取り返しのつかない喪失感に裏打ちされている。語り手＝飛行士は、王子との永遠の別れを予感して、「取り返しのつかないという感情（le sentiment de l'irréparable）にとらえられて、凍りつくような思いをした」[p.90] と言っていた。この悲しみの感情こそが、王子の存在を確かなものにしているように思われる。この感情はどこから生じるのだろうか。

失って初めて大切なものになる。去りゆく王子への惜別の情から、飛行士は涙を流しそうになる。その涙とは、サン＝テグジュペリの生きるこの地上において、今まさに愚かな戦いによって人間性を喪失していく地球の同胞への憐憫の情が結晶したものかもしれない。その源泉にあるのは、サン＝テグジュペリのモラルであり、それは気高さに満ちた責任感と呼びうるものだ。思い起こそう。「ぼくはあのバラに責任があるんだ」と、王子は二度繰り返して言っていた [(5)]。それは、キツネが教えた言葉「きみが飼い慣らしたものにはいつまでも責任があるんだ。きみは、きみのバラに責任があるんだよ…」« Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose... » [p.78] に基づいている。

「責任がある」« responsable » という語は、ラテン語の動詞 *repondere*「約束、誓約に応じる」に由来しており、« répondre » つまり「応答する」ことの可能性を意味する [(6)]。責任すなわち応答可能性を決して忘れず徹底的に引き受けるモラル。21 世紀に生きる私たちは、混迷する国際社会の中で、まさしく「取り返しのつかないという感情」に心を痛めている。人々の命がいともたやすく奪われ、人々の心がすさんでいく現代の世界情勢に困惑しつつ、私たちは涙を禁じ得ない。それは、サン＝テグジュペリがその傑作を通して表現した涙にも通じる、取り返しのつかないという感情と同質のものにほかならない。サン＝テグジュペリの作品 *Le Petit Prince* は、自分は何に対して「責任」があるのかという自問へと、私たち一人ひとりを誘(いざな)って

いるように思われる。あなたのバラはどこにあるのか、そして、あなたはそのバラにどのような約束をして、その約束をどのように果たそうとしているのかと。

ところで、この作品に出てくる vous のすべてが複数形であるわけではない。第 IV 章で次のような一節がある。

> Ainsi, si vous leurs dites, « La preuve que le petit prince a existé c'est qu'il était ravissant, qu'il riait, et qu'il voulait un mouton. Quand on veut un mouton, c'est la preuve qu'on existe », elles hausseront les épaules et vous traiteront d'enfant ! Mais si vous leurs dites : « La planète d'où il venait est l'astéroïde B 612 », alors elles seront convaincues, et elles vous laisseront tranquille avec leurs questions. [p.24]

> そんなふうだから、あなたがたとえば「王子さまがいたという証拠、それはね、王子さまが魅力的だったし、笑っていたし、それにヒツジをほしがったということだよ。ヒツジをほしがるというのは、その人がいるという証拠でしょ」と言ったら、大人たちは肩をすくめて、あなたを子ども扱いすることだろう！けれど、もし「彼が来た星は小惑星 B612 だ」と言えば、大人たちは納得して、それ以上うるさく質問はしないだろう。

ここに見られる vous も、読者を指し示しているが、フランス語原文の下線部に示されているとおり、「子ども扱い」の enfant という名詞も、「うるさく質問はしない」の tranquille という形容詞も単数形なので、それに係る vous が単数形であることがわかる。単数形で表した読者の vous が、物語の最後で明示的に複数形に置かれるのはなぜだろうか。それは、物語終盤の「星」の話と関係があるのではないか。第 XXVI 章で、王子は次のように言う。

Tu regarderas, la nuit, les étoiles. C'est trop petit chez moi pour que je te montre où se trouve la mienne. C'est mieux comme ça. Mon étoile, ça sera pour toi une des étoiles. Alors, toutes les étoiles, tu aimeras les regarder... Elles seront toutes tes amies. Et puis je vais te faire un cadeau... »
Il rit encore.
« Ah ! petit bonhomme, petit bonhomme, j'aime entendre ce rire !
— Justement ce sera mon cadeau... ce sera comme pour l'eau... [p.91]

「夜になったら、星を見てね。ボクのところは小さすぎるから、ボクの星がどこにあるのか見せてあげられない。そのほうがいいんだ。ボクの星は、きみにとってはたくさんの星のうちのひとつだ。だから、全部の星を見たくなるでしょ……。全部の星がきみの友だちになるんだ。それから、ボクのプレゼントをあげるよ……。」
王子さまはまた笑った。
「ああ、ぼうや、ぼうやのその笑い声を聞くのが好きだよ。」
「それさ、それがボクのプレゼントだよ……、水のときと同じだよ……。」

王子の星は小さすぎるので、指し示すことは不可能だが、多くの星のなかのどこかにあるのは確かである。したがって、語り手＝飛行士は王子の笑い声を聞くために（王子の存在を確かめるために）、すべての星を見ることになる。それと相似形をなして、語り手＝飛行士の物語は、初めは個別の（単数の）読者「あなた」に向けられていたのが、やがてすべての（複数の）読者「あなたたち」へと向けられることになる。飛行士にとって王子という個別の存在が、すべての星という全体へと拡大したように、語り手にとっての読者も、個別の存在から全読者という全体へと拡がる。飛行士は、ひとりの王子との関係によって幸せを得るとともに、その王子を含むすべての星との関係によって幸せを得る。さらに、その幸せは飛行士ひとりのものではなくなり、すべての読者のものとなる。むしろ、飛行士が語り手と

して示したこの物語によって、すべての読者の幸せが実現し、そしてそのことによって初めて飛行士という個人の幸せが実現すると言えるかもしれない。それはまるで、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない[(7)]」という宮沢賢治の言葉にも通ずるように思われ、サン＝テグジュペリの静謐な物語世界が、独特の宗教的宇宙を形成していることを感じさせるのである。

註

（1）使用テクストは、Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, Gallimard, « Folio », 1999. 日本語訳および引用文中の下線等はすべて小林による。引用箇所のページは、本文中の引用末尾に [p.99] のように示す。

（2）B) と G) は主語人称代名詞、A)、C)、D) は補語人称代名詞、E) は再帰代名詞、F) は強勢形人称代名詞。

（3）原文は次のとおり。« La reconnaissance en soi-même, par le lecteur, de ce que dit le livre, est la preuve de la vérité de celui-ci, et vice versa, au moins dans une certaine mesure, la différence entre deux textes pouvant être imputée, non à l'auteur mais au lecteur. » Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome IV, 1989, p.490.（日本語訳および下線は小林による。）

（4）例えば第 III 章では、「王子さまは、ぼくにはたくさん質問するくせに、ぼくの質問はぜんぜん聞いていないようだった。たまたま王子さまが口にした言葉から、少しずつ、いろんなことがわかったのだった。」と述べている。また、第 IV 章で語り手は、（自分が 6 歳の時に画家になる夢を諦めさせられたのだからとして）王子の絵がうまく描けず、この本に描かれる王子の姿がそれぞれに違っていることを弁明しているが、これも、王子の全貌を示すことはできないということを、「絵」の話題に託して述べていると言えよう。

（5）« Je suis responsable de cette fleur... » [p.86], « ma fleur... j' en suis responsable ! » [p.95]

（6）responsabilité（仏）「責任」＝「応答可能性」。① *Le Petit Robert* によればその語源は次のとおり。responsable（仏）「責任がある」< répondre（仏）「答える、応答する」< *repondere*（ラ）「約束、誓約に応じる」≒ *spondere*（ラ）「約束する」。②なお、鷲田清一は、responsibility［英］について次のように説明している。「英語の responsibility は、分解すれば『リスポンス』と『アビリティ』、つまり『リスポンドする用意がある』ということです。他人が困っていたり、何かを訴え

てきたり、遠慮がちに助けを求めてきたりしたときに、それに応える用意があるということです。」（『特別授業 3.11 君たちはどう生きるか』河出書房新社、2012 年、77 頁。）③ ニーチェは『道徳の系譜』「第二論文〈負い目〉、〈良心の疚しさ〉、およびその類いのことども」において、次のように述べている。「約束することのできる動物を育成すること、これこそは自然が人間を眼中において自ら課したあの逆説的な課題そのものではあるまいか？」「まさにこれこそは責任の由来の永い歴史なのである。」（『ニーチェ全集Ⅱ』ちくま学芸文庫、1993 年、423-425 頁。下線は小林。）④ ポール・リクールは『他者のような自己自身』で次のように述べている。「他者から発する動きがその行程を終えるのは私においてである。他者は私を責任あるものとして（responsable）、つまり応答する（répondre）能力あるものとして構成する。こうして他者の言葉は、それによって私が自分の行為の起源を私自身に帰するところの言葉の起源に位置するようになる。」（久米博訳、法政大学出版局、1996 年、414 頁。）« C’est en moi que le mouvement parti de l’autre achève sa trajectoire : l’autre me constitue responsable, c’est-à-dire capable de répondre. Ainsi la parole de l’autre vient-elle se placer à l’origine de la parole par laquelle je m’impute à moi-même l’origine de mes actes. » (Paul Ricœur, *Soi-même comme un autre*, Seuil, 1990, p.388. 下線は小林。)

（7）『農民芸術概論綱要』、『宮沢賢治全集 10』ちくま文庫、1995 年、18 頁。